



TITLE:

京大広報 No. 589

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 589. 京大広報 2004, 589: 1671-1690

ISSUE DATE:

2004-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196510>

RIGHT:



京大広報

No. 589

2004. 4

目次

〈大学の動き〉

- 総長、理事、監事等が発令される……………1672
部局長の交替等……………1675
第8回運営諮問会議の開催……………1676

〈部局の動き〉

- 東南アジア研究所看板除幕式……………1678

〈寸言〉

- 関西六大学札幌OBゴルフ対抗戦
黒木俊郎……………1679

〈随想〉

- 赴日留学生予備教育の思い出
名誉教授 大谷晋一……………1680

〈洛書〉

- 「落書き研究会」 庄垣内正弘……………1681

〈栄誉〉

- 間野英二名誉教授、月田承一郎教授が
日本学士院賞を、河合雅雄名誉教授が
日本学士院エジンバラ公賞を受賞……………1682

- 松本 紘宙空電波科学研究センター長が英国王立
天文学協会から Associate Award を受賞……………1684
齋藤 烈工学研究科教授が AAAS Fellow に
選ばれる……………1685

〈訃報〉……………1685

〈日誌〉……………1687

〈話題〉

- 平成15年度国立学校優秀施設表彰において
文教施設部長賞「計画部門」を受賞……………1688
教育学研究科附属臨床教育実践研究センターが
リカレント教育講座を開催……………1689

〈お知らせ〉

- 薬学研究科第19回 21世紀の薬学を語る
京都シンポジウム……………1690

〈医療技術短期大学の動き〉

- 医療技術短期大学部長の再任……………1690

〈編集後記〉……………1690



道庁の八重桜（黒木俊郎氏撮影）
—関連記事 本文1679 ページ—

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

総長、理事、監事等が発令される

4月1日、国立大学法人京都大学が発足したことに伴い、尾池和夫総長が国立大学法人京都大学総長に就任し、理事、副学長、経営協議会委員および新設された総長特別顧問がそれぞれ4月1日付けで任命された。

また、監事が、文部科学大臣により任命された。

総長

任期：4月1日～平成20年9月30日



尾池 和夫

理事

任期：4月1日～平成17年9月30日



企画・評価担当
(副学長)
金田 章裕
前副学長・文学研究科教授



教育・学生担当
(副学長)
東山 紘久
前副学長・教育学研究科教授



施設・研究・国際交流担当
(副学長)
入倉 孝次郎
前総長補佐・防災研究所教授



総務・人事・広報担当
本間 政雄
(副学長)
前事務局長



法務・安全管理担当
田中 成明
(副学長)
前法学研究科教授



財務・情報基盤担当
辻 文三
(副学長)
前総長補佐・工学研究科教授



病院担当（非常勤）

佐古 伊康

医仁会武田総合病院院長
（財）しずおか健康長寿財団理事長

監事

任期：4月1日～平成18年3月31日



原 潔

前神戸商船大学長



佐伯 照道（非常勤）

弁護士（北浜法律事務所）

副学長

任期：4月1日～平成17年12月15日 任期：4月1日～平成17年3月31日



丸山 正樹

高等教育研究開発推進機構長



松重 和美

国際融合創造センター長

総長特別顧問

委嘱期間：4月1日～平成17年9月30日



平井 紀夫

オムロン株式会社
特別顧問（非常勤）

経営協議会学外委員

任期：4月1日～平成18年3月31日



石井 米雄
大学共同利用機関法人
人間文化研究機構長



井手 正敬
西日本旅客鉄道(株)
取締役相談役



大南 正瑛
学校法人京都橘女子学園
特別顧問



北城 恪太郎
日本アイ・ビー・エム(株)
代表取締役会長
(社)経済同友会代表幹事



熊谷 純三
鳩居堂製造(株)
代表取締役



佐村 知子
京都府副知事



田村 和子
(社)共同通信社
客員論説委員



野村 明雄
大阪ガス(株)
代表取締役会長
大阪商工会議所会頭



八田 英二
同志社大学長



松本 和子
早稲田大学理工学部教授
総合科学技術会議議員



村田 純一
村田機械(株)
代表取締役会長
京都商工会議所会頭



吉田 修
奈良県立医科大学長

このほか、経営協議会学内委員として理事7名と吉岡一男法学研究科長、本庶 佑医学研究科長、笠原三紀夫エネルギー科学研究科長および佐和隆光経済研究所長が任命された。

部局長の交替等

(新任)

文学研究科長・文学部長

藤井譲治文学研究科教授（歴史文化学専攻日本史学講座担当（日本近世・近代史））が、紀平英作文学研究科長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



経済学研究科長・経済学部長

西村周三経済学研究科教授（現代経済学専攻現代経済学講座担当（医療経済学））が、下谷政弘経済学研究科長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成18年3月31日まで。



人間・環境学研究科長・総合人間学部長

富田博之人間・環境学研究科教授（物質物性相関論講座担当（統計物理学））が、江島義道人間・環境学研究科長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成18年3月31日まで。



アジア・アフリカ地域研究研究科長

市川光雄アジア・アフリカ地域研究研究科教授（地域動態論講座担当（人類学アフリカ地域研究））が、加藤 剛アジア・アフリカ地域研究研究科長の後任として、4月9日付けで任命された。任期は平成18年4月8日まで。



生存圏研究所長

4月1日に木質科学研究所および宙空電波科学研究所を発展的に統合・再編して設置された生存圏研究所の初代所長に松本 紘生存圏研究所教授（中核研究部生存圏開発創成研究系宇宙電波科学分野担当（宇宙電波工学））が、4月1日付けで任命された。任期は平成18年3月31日まで。



東南アジア研究所長

4月1日に東南アジア研究センターを発展的に改組・再編して設置された東南アジア研究所の初代所長に田中耕司東南アジア研究所教授（人間生態相關研究部門担当（熱帯農学））が、4月1日付けで任命された。任期は平成18年3月31日まで。



福井謙一記念研究センター長

中辻 博工学研究科教授（合成・生物化学専攻合成化学講座担当（量子物理化学））が、森島 績福井謙一記念研究センター長の後任として、4月1日付けで任命された。任期は平成18年3月31日まで。



(再任)

化学研究所長

高野幹夫化学研究所附属元素科学国際研究センター教授(固体化学)が、4月1日付けで化学研究所長に再任された。任期は平成17年3月31日まで。

ウイルス研究所長

下遠野邦忠ウイルス研究所教授(がんウイルス研究部門担当(分子生物学))が、4月1日付けでウイルス研究所長に再任された。任期は平成18年3月31日まで。

低温物質科学研究センター長

水崎隆雄理学研究科教授(物理学・宇宙物理学専攻物質物理学講座担当(低温物理学))が、4月1日付けで低温物質科学研究センター長に再任された。任期は平成18年3月31日まで。

エネルギー理工学研究所長

吉川 潔エネルギー理工学研究所教授(エネルギー生成研究部門担当(原子核工学))が、4月1日付けでエネルギー理工学研究所長に再任された。任期は平成18年3月31日まで。

学術情報メディアセンター長

松山隆司情報学研究科教授(知能情報学専攻知能メディア講座担当(知能情報学))が、4月1日付けで学術情報メディアセンター長に再任された。任期は平成18年3月31日まで。

第8回運営諮問会議の開催

第8回運営諮問会議が2月13日(金)に本部事務局棟特別会議室において石井米雄委員、伊東光晴委員、井村裕夫委員、稲盛和夫委員、大南正瑛委員、大西正文委員、興膳 宏委員、竹内佐和子委員、館 糾委員の出席のもと、開催された。

なお、運営諮問会議の目的及び委員の氏名については、ホームページ(http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05_kaigi/k_gij.htm)に掲載している。

主な意見

【京都大学の現状について】

- 東南アジア研究センターが附置研究所(東南アジア研究所)として設置され、日本における地域研究のコンソーシアムが立ち上がり、その拠点になることは大変喜ばしい。今後の研究成果に期待したい。
- 21世紀COEプログラムは、大学の新しい構想を採択・推進するということで設置されたもので

今後も継続して公募を行うことになっている。大学の中でよい構想があれば積極的に提出し、それを契機にして共同研究や施設整備などを行うとよい。

また、法人化後、文部科学省は運営費交付金に毎年度効率化係数を掛けた経費を財源として、競争的な新規事業を立ち上げるというような方針を持っているので、大学はこの方面にも目を向けて全国共同研究とかいろんなことをやるとよいと思う。

今後の概算要求にあたり、文部科学省の中でも



大学関係は高等教育局、研究所関係は研究振興局と担当局が分かれているので、要望する側も受ける側も調整が必要となる。

- 国立大学附属病院は、民間レベルではできない新しい医療・高度先端医療の研究・開発を担う場として重要な役割を果たしている。国はこうしたことに重点的に投資すべきで、病院側もその説明責任を果たすことが大切である。

【法人化の準備状況について】

- 法人化後、大学運営に必要な委員会を新たに設置していくとのことであるが、議論は大いによりが全員が賛成というのにはあり得ないし、やれないと思う。そうなるとトップのリーダーシップが必要となる。

大学は知の源泉であって、大切なことはベースを持っていること、それは特に教育である。長い目で見て世界の中で競える学問のために、いろんな人材を創成することが重要であると思う。例えば、ハーバード大学では、いろんな技術の勉強をさせる仕組みができており、経済学に生産技術を取り入れたりしている。このように発想を変えることなどは、トップのリーダーシップが成してきた結果である。

- 大学運営のための重要な委員会として、全学企画委員会、財務委員会、施設整備委員会の3つを挙げているが、これは現在の財務省、文部科学省、大学の関係と同様な状況になるのではないかな。それぞれが単に意見を出し合っているだけではなか

なか收拾がつかない。法人には、リーダーシップが必要であり、委員会を統括してジャッジしていくのは、やはり理事長である学長だと考える。

- 法人化で特に懸念されるのは、労働問題である。労働基準法の適用を受けることになるが、裁量労働制、労働条件など労働者側の要望等に対応していくには、労働問題担当の専門家でないと処理できない。些細な要求にも対応できる専門家、コンサルタント、さらには教育現場を知った専門家が必要と考える。

- 今日の話では、法人化後、京都大学がその独自性、固有性をどこに置いて、何を行い、どう変化しようとしているのかが見えてこない。京都大学は政策指向の学問よりも、もっと総合的な、学問が独自に発展していくような形を目指すことにエネルギーを使うべきではないか。今、京都大学が持っているエネルギーをアドミニストレーションや組織論ばかりに集中させるのは、本質ではないのではないか。委員会だけがスタートし、法人化後も何も変わらないと誰もが思ってしまう。今や、学問全体が社会から遅れた状態になりつつあるので、京都大学にはもっと本質的な議論をしてほしい。

- 京都大学をこういう大学にする、ということを考えてもらいたい。基礎研究、応用研究の重視はもちろんのこと、国際的に見ても一定レベル以上の大学でなければならない。そのためには、世の中は極めて早く動いており、これに対応するスピードも大事で、外国に負けない、国際的に見ても研究・教育面で競争力がある、そういう大学にしてほしい。

- 法人化に際しては、まず、先生自らが中心となっていくいろいろな改革を行うという方向付けと先生方の意識改革が重要になる。

- 大学ができた当初は、1つ1つの学問分野が

はっきりしていたのが、今ではバラバラになり過ぎ、専門性が重視されるあまりに偏った議論になってしまい、外部から見ると興味に欠け物足りない感じがする。

京都大学には創学の精神はないと言いつつもやはりあると思うので、法人化は、本来こうであったというようなイメージを打ち出すよい機会である。

【入学試験の在り方について】

- 入試で大切なことは、京都大学がどのような人材を求めているのかということ。従来の入学者選抜には、学部自治が強くて総長の意見が出せないところがあった。試験による点数評価だけでなく、京都大学をどのような大学にしていくかという方向性に関わって、そのための意欲のあるいい人材を確保する工夫をしてもらいたい。

また、入試担当副学長には、是非とも、アメリカやイギリスなど諸外国の入学者選抜方法を視察

し、参考にして欲しい。

- 入試改革はまず、大学院入試から見直してはどうか。ハーバード大学では教授推薦に重みを持たせ、創造的な人材を入れることを行っている。

また、いい人材を京都大学内から確保しようとするだけでなく、自らもっと幅広い所から人材を確保するよう動くべきである。

- 入試においても創学の精神を打ち出して、京都大学の理念やイメージを高めるようにするなどして、よりよい制度を確立してもらいたい。

- 今までの国立大学には何か物足りなさを感じていたが、法人化を機にいろんな工夫をして欲しい。例えば、誰もが学び・修了したいと思うような魅力ある大学であることを示したり、優秀な人材は武者修行に出すなどの工夫も必要ではないか。

部局の動き

東南アジア研究所看板除幕式

本年4月に改組した東南アジア研究所の看板除幕式が4月2日に執り行われた。

関係教職員が多数見守る中、尾池和夫総長、本間政雄理事、田中耕司所長、白石 隆副所長の立ち会いのもと、看板の除幕式が行われた。田中所長より、附置研究所への改組に至る経緯の説明とこれを機会に所員への一層の努力を求める挨拶があった後、尾池総長より東南アジア研究センター設立当初のいきさつや、刊行初期の季刊誌『東南アジア研究』に総長を含む地質・地震関係者の論文が掲載されたエピソードなどを紹介する祝辞があった。

式後、加藤 剛大学院アジア・アフリカ地域研究研究科長、山田 勇前副所長を交え東南アジア研究所とアジア・アフリカ地域研究研究科を核にした地

域研究拠点を川端通荒神橋の現キャンパスにつくる構想をめぐって、意見が交換された。

(東南アジア研究所)



寸言

関西六大学札幌OBゴルフ対抗戦

黒木 俊郎

京大野球部は弱かった。私が京大に在学した昭和30年代、京大は関西六大学リーグに加盟していたが、応援に行くとに負けた。昭和36年頃に吉田のグラウンドで東大野球部との対抗戦があったが、これも負けた。同志社に負けるのは許せるが、地元で東大にまで負けるのは、許せなかった。翌日の講義で教官が「最近、スポーツの東大、学の京大ですな」と自嘲気味に感想を述べた。

それから40年を経た21世紀の札幌で、私ども北海道京大会（京大OBの北海道地区同窓会）の会員は、野球部の借りを返そうと、関西六大学OBとゴルフの対抗戦を毎年行なっている。参加校は、同志社、立命館、関大、関学、神戸大、京大の6校。各チームは選手を何人出してもよいが、団体戦は上位3人の合計スコア（ダブルペリアのハンディ付き）で勝敗を決する。そのため、出場選手の数が多いチームほど有利になる。北海道京大会は、初参加の01年が5位。02年は4位だったが、個人戦では私が優勝。その余勢で03年は団体戦の優勝を狙ったが、再び4位に終わった。しかし、京大野球部よりは強い。

今年の対抗戦は、8月6日である。これに備えて、出場選手を募り練習会の日程を組まなければならない。還暦を過ぎたオジンが「打倒立命」とか「打倒関学」などと言いながら練習に励む図は漫画に近い



美瑛・ジャガイモの花と麦畑

が、学生時代にスポーツに縁が無かった者も、京大会の選手として出場できるのであるから、まことに幸せである。対抗戦のお陰で会員の結束も固まり、同窓会も活性化した。

北海道京大会は、昭和20年代から活動しており、現在、約300名の会員を擁している。転勤で北海道にいられた方は、是非、北海道京大会事務局（札幌市中央区大通り西10丁目南大通ビル黒木法律事務所内 電話（011）251-5863・FAX251-3802）に連絡していただきたい。

北海道は、実に美しく魅力的な土地である。私は、裁判官として北海道に転勤したが、永住を決意して弁護士となった。北海道の美しさを京大の皆さんにもお伝えしたく、私が撮影した風景写真を添付します。

（くろき としろう 弁護士 昭和39年法学部卒）



百合が原公園のムスカリ



美瑛の四季彩の丘にて

随想

赴日留学生予備教育の思い出

名誉教授 大谷 晋一

1982年文部省は中国国家教育委員会が実施する赴日本国大学院留学生予備教育に協力することを決定した。予備教育の目的は学生の渡日前に日本語による基礎的専門教育および言語教育を実施し、日本の大学院での学習の円滑化に資することにある。京大と東京工業大学が基礎的専門教育の担当校となり、それぞれ大連と長春で予備教育を行った。京大からは1982年から1988年まで7回、延べ53人の教官が参加した。その主力となったのは教養部教官で、私は1987年に徳岡善助団長ら8人（教養部6人、工学部2人）のメンバーの一員としてその任に当たった。

6月30日京大をバスで出発し、上海経由で北京に到着。中国国家教育委員会と日本大使館の招待宴が続き、この国家事業の重みを実感した。7月4日大連に移動、予備教育が行われる大連外国語学院内の宿舎に入った。学院は市の中心である中山広場から南に歩いて20分ぐらい、南山の麓にあった。宿舎は五階建ての新しい建物。ただしエレベーターはない。私の部屋は二階の3DK。冷蔵庫、洗濯機付きで、定期的に掃除してもらえた。食堂で三食も供されたし、ここでの生活は申し分なかった。7月8日授業開始。学生は68人（20人は女性）で、その7割が理系。中国の大学は早くから細分化した専門教育をしており、学生の専門は多岐にわたった。個々の学生の専門に細かく対応する授業は不可能で、授業科目は数学、物理学、化学、生物学、情報科学、経済学、社会学とし、学生に選択させ、それぞれ講義と講読を行った。他にパソコンを使用する必修の情報処理実習をした。教科書は日本から持参し、学生に配布した。月曜日から金曜日まで8時から基礎日本語の授業があり、そのあとで80分間の専門教育の講義を午前1コマ、午後2コマした。昼休みは2時間。学生は学院の近くにある寮に戻って昼食をとり、昼寝をする。講読は土曜日午前に行った。私のクラスは



男女相半ばする15人。京大の一般教育レベルの有機化学と一般化学の講義をし、米国の有機化学テキストブックによる外書講読をした。英語から日本語への即座の変換は学生にはちょっと苦労があったようである。全国から集まった学生は極めて優秀で、熱心に勉強した。彼らとの邂逅は楽しい思い出である。学生たちは日本で勉学を始めるにあたり困らぬ程度の日本語能力を得たと思っている。

8月28日修了試験。試験は日本から派遣された試験官立会いで行われた。学生たちの緊張ぶりは相当なもので、日中間の受験生が守るべきルールに違いがあることを実感する一幕もあった。翌日に卒業式を行い、次いで場所を中心街の料理屋に移して学生たちと送別会をした。私たちはその場で彼らの留学先を初めて非公式に知り、それを彼らに伝えた。京大には6人が来ることになった。彼らの多くが五年間の日本留学で学位を得、現在中国で頑張っているものと思っている。引続き日本の大学でポストを得ている者もいる。

大連の夏は爽やかだった。時計を1時間進める夏時間制のため日没まで時間があり、暇を見つけては街を散策した。時には、市バス、市電や日本から持参した自転車も利用し、既に改革開放路線の兆しがあった街並みや市民の暮らしを見て飽くことがなかった。大連の終戦時の人口は83万人、そのうち日本人は22万人だったという。大連が戦前既に近代的な大都市だったことを示す面影は随所にあった。中山広場に面した建物、埠頭、大連駅、旧大連病院などはそのまま使用されていた。労働公園には野球場が二つ残っていた。野球と言えば、私たちは学生のレクリエーションとしてソフトボール大会を企画し、道具一式を持って来ていた。野球を全く知らぬ学生たちに最低限のルールを教えただけで、試合をしてもらったが、学生たちは大いに熱中し、この企画は大成功だった。

（おおたに しんいち 元総合人間学部教授、平成11年退官、専門は有機化学）

洛書

「落書き研究会」

庄垣内 正弘

中学生時代に「落書き研究会」なるものに参加して昼休みに近所の神社へ「調査」に出かけた。本殿の裏壁にびっしり書かれている。正しくは漆喰に釘で刻まれている。重なり合ったり、風化したり、なかなか読みづらい。虫眼鏡をとりだす熱心な輩もいる。大概是エロチックな内容を探っているのだが、ぞっとする文章も現れる。「恨みは必ず晴らす」男の名前に死装束の三角頭巾が冠されている。「これでいいのだ、これでいいのだ、もうこれでいいのだ」など間抜けていておかしいが、なんだか不安になる。「死の恐怖から逃れる唯一の方法は死ぬことだ」中学生にとっては刺激の強いことばである。しかし、これは後に小説の中に類似文をみたので「盗作」かもしれない。「研究会」の調査は数回で終了した。その間もその後も個人調査のおこなわれた形跡はない。個人調査は陰湿な一種の「のぞき行為」に思われていた。

古今東西、落書きの無い国はない。むかし西域とよばれた地方、トルファンや敦煌あたりにも古い仏洞の壁にたくさんの落書きがみられる。多くは参拝者の名前、日付であるが、祈願文や懺悔文を書いたものもある。それらは丁寧に写し取られすでに研究資料にされている。洞窟から出土した仏典断片類にもときどき落書きがみられる。型どおりの仏典文に比べて落書きはよほどおもしろい。トルファン出土のウイグル語仏典には表紙裏面に漢字で「此著子我正心小僧之彼」と書かれたのがある。この漢字列を漢文として読むのはむずかしい。実はこれはつぎのようにウイグル語を漢字に逐一置き換えた「擬似漢文」である。

bu čaysi män čisim šabi qya-nīng ol

此 著子 我 正心 小僧 之 彼

「この冊子は我、čisim 小僧のものだ」

いくつかおもしろい点がある。まず čaysi は冊子の音写であるが、これに「著子」をあてている。「冊

と「著」は本来の漢語音としては初頭子音も母音も異なるがウイグル人の漢字音ではいずれも čay と読むので、意味を考えずに同音の「著」をもちいた。čisim も「正心」の音写である。このウイグル僧は漢語名をもっていたらしい。末尾の「彼」はとくにおもしろい。これに対応するウイグル語 ol は本来「彼」「それ」を表すが、コピュラ（上文では「ものだ」の「だ」に相当する）にもなりうる。ここではコピュラ機能を担っているのに漢字「彼」をあて、しかもウイグル語順と同じ文末に置いているので判じ物になる。これが解けるのは同じ面の片隅に上掲のウイグル文がウイグル文字で小さく書き込まれているからである。なお、コピュラ表示の「彼」は敦煌出土の仏典の落書きにもみられるのでウイグル僧の間でふつうに使われていたらしい。落書きはウイグル人の漢語や漢字使用を探る上で貴重な資料となる。

「落書き研究会」メンバーの頃、畑の中にどうしたわけか下駄箱がころがっており、大きく「どうりいれ」と墨書されているのにおどろいた。ダ行とザ行の区別困難な地方に遠出したおりのはなし。後、院生時代に同地方の出身者が「今日はでんでんぜんわがかかってこない」と言ったのでみんな大笑い。言語学専攻者としては少し問題がある。ともあれ、落書きは正直に人の言葉を映し出すところに値打ちがある。あの神社の落書きもまじめに研究しておけばよかった。半世紀もむかしの話だから、壁はすでに塗り替えられたか崩落してしまったにちがいない。当時の書き手も生存しているとはかぎらない。まさか、インターネットの掲示板に美しい明朝体でカチカチ書き込んでいるとは思えない。神罰も加護も無いかわりに、のぞき見る者が五万といて遠慮無く意見を述べ立てる。「盗作」はすぐに指摘され、言葉づかいまで訂正される。検閲もある。すくなくとも「落書き研究会」の研究対象にはなりえない。

(しょうがいと まさひろ 文学研究科教授 言語学)

栄誉

間野英二名誉教授、月田承一郎教授が日本学士院賞を、
河合雅雄名誉教授が日本学士院エジンバラ公賞を受賞

このたび、間野英二名誉教授、月田承一郎教授が日本学士院賞を、河合雅雄名誉教授が日本学士院エジンバラ公賞をそれぞれ受賞されることになりました。

授賞式は、6月中旬、東京・上野の日本学士院会館で行われる予定です。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

間野英二名誉教授は、昭和36年に京都大学文学部史学科（東洋史学専攻）を卒業、同38年同大学院文学研究科修士課程を修了、同41年同博士後期課程を単位取得退学、同43年に大阪大学文学部助手に就任された。その後、同44年9月から47年6月までハーヴァード大学に留学、同47年12月に京都大学文学部助教授となり、開設されて日の浅い西南アジア史学講座を担当された。同61年教授に昇進、平成8年に同大学院文学研究科教授に配置換えとなり、同14年定年により退官され、名誉教授の称号を受けられた。同名誉教授は、本学在職中、西南アジア史学講座における教育・研究指導ばかりでなく、文学部羽田記念館（内陸アジア研究施設）の運営にも長年貢献され、また、史学研究会理事長、東洋史研究会会長、西南アジア研究会会長など学会の要職をも歴任された。現在は、龍谷大学文学部教授をつとめておられる。

同名誉教授の専門領域はイスラム時代の中央アジア史であり、特に14世紀末から15世紀に広大な領土を支配したティムール朝の専門家として、国内はもちろん海外でも高名である。今回の受賞の専門分野は東洋史学であるが、同名誉教授のような、中国史以外を専攻する研究者が受賞するのは、きわめて異例のことである。同名誉教授の研究方法是、文献学的研究を重視するもので、我が国では全く馴染みのない難解な言語の文献に果敢に取り組まれた。中でも、ティムール朝の王子でインドのムガル朝の始祖バーブルがチャガタイ・トルコ語（中央アジアの古典トルコ語）で著した回想録『バーブル・ナーマ』



の研究には並々ならぬ情熱を注がれ、データベース化に取り組む一方、海外の様々な機関に保存される同書の諸写本を直接現地に赴いて調査された。その努力の成果は『バーブル・ナーマの研究』全4巻（松香堂）で見事に結実した。この大作は、校訂本（第1巻）、総索引（第2巻）、日本語訳注（第3巻）、研究篇（第4巻）で構成され、アメリカやロシアの著名な学会誌で取り上げられ、非常に高い国際的評価を与えられた。さらに、この業績は、バーブルの故郷ウズベキスタン（旧ソ連）でも広く紹介され、同名誉教授は、平成11年バーブル国際基金賞を受賞された。

今回受賞の対象となった著書『バーブルとその時代』（松香堂、2001年）は、『バーブル・ナーマの研究』第4巻にあたるもので、『バーブル・ナーマ』とその著者バーブルだけではなく、同時代の中央アジア史やティムール朝史に関する学術的な研究成果が収められている。そのうち主要なものが既に英文で欧米の学界に発表されていることは、この研究書がきわめて高い水準にあることを証明している。同名誉教授が、我が国では全く未開拓であった領域において、質量ともに瞠目すべき学術的成果を挙げられたことが、今回の受賞であらためて確認されたいと言える。

（大学院文学研究科）

月田承一郎教授は、昭和53年東京大学医学部医学科を卒業、同大学大学院医学系研究科博士課程を同57年に修了し、医学博士号を取得、同年に同大学医学部講師となり、同61年に東京都臨床医学総合研究所室長、平成2年に岡崎国立共同研究機構生理学研究所教授を経て、同5年から京都大学医学部教授（併任）に就任され、平成7年に大学院医学研究科に配置換えとなり、現在に至っている。



月田教授の専門は電子顕微鏡レベルの形態学に基づいた分子細胞生物学であり、細胞骨格・細胞接着の分野で顕著な業績を挙げてこられた。その中でも、近年のクローデインの発見に代表される「上皮細胞間バリアーの分子基盤」に関する研究は国際的に高く評価されており、今回の受賞の主な対象となった。

多細胞動物は上皮細胞シートに囲まれることにより、まず自己の内部を外界から区別している。さらに、体の内部は、上皮細胞や内皮細胞のシートにより、いくつものコンパートメントに分けられている。これらのことが可能となるためには、細胞シート内の隣り合う細胞間には水・イオン・蛋白質等が漏れ

ないようにシールする分子機構が必要である。この細胞間をシールする構造としてタイトジャンクション（TJ）が電子顕微鏡によって発見されたが、細胞間バリアーを実際に担う分子基盤については、多くの研究者の努力にもかかわらず、長い間明らかにされなかった。同教授らは、細胞間接着装置の単離法の確立から始まる研究の中でTJの分子構築の解析を進め、遂にTJで機能する接着分子クローデインの同定に成功した。クローデインは細胞膜の中で線状に重合するユニークな接着分子で、大きな遺伝子ファミリーを形成している。同教授らの研究により、クローデインが多細胞動物におけるバリアーを担う中心的な接着分子であることが次々と示され、バリアーの分子生物学的研究が急速に進展した。

この同教授らの一連の斬新な研究は、細胞生物学分野での真の意味でのブレークスルーとして広く国際的に認知され、教科書的な事実として捉えられており、その成果は医学生物学の分野できわめて大きなインパクトを与え続けている。これらの業績に対し、これまでに高松宮妃癌研究基金学術賞、井上学術賞、上原賞、マイエンブルグ賞（ドイツ）など多くの賞が授与されている。

（大学院医学研究科）

河合雅雄名誉教授は、昭和27年京都大学理学部を卒業後、同45年京都大学霊長類研究所教授に就任、同研究所所長を務めた後、同62年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。その後、日本福祉大学教授や日本モンキーセンター所長などを経て、現在、兵庫県立丹波の森公苑長、日本生命財団会長、兵庫県立人と自然の博物館名誉館長を務めている。また日本霊長類学会会長、日本ナイル・エチオピア学会会長などを歴任するとともに、霊長



類学の英文学術誌「Primates」の編集長を務められた。

同名誉教授の専門は霊長類学であり、個体識別法に基づく野外研究を行い、ニホンザルの社会構造の解明などの面で多くの先駆的な業績を挙げた。野生ニホンザルの研究の代表的なものは、宮崎県幸島の「サルイモ洗い」の発見である。人間以外の動物が行う文化的行動の詳細を観察記録した例として、その成果は広く知られ、同名誉教授による英語論文報告は今も引用されている。また、ニホンザルの社会的順位についても、「依存順位」の発見など、社会的順位をダイナミックな過程として捉えた。こ

うした初期の功績に対して、昭和44年に朝日賞が贈られた。

この野生ニホンザルの研究を基礎に、同名誉教授は、ゴリラの調査を手がけるとともに、日本でテレメトリーを動物につける最初の計画を組織し、このテレメトリーを使ってウガンダの森林性霊長類の生態を明らかにしようとした。その後、エチオピアのゲラダヒヒやカメルーンのドリル・マンドリルなどに焦点をあて、オナガザル科の霊長類の未知の社会の解明に努力した。その成果の一部は、英文書籍として報告されている。

同名誉教授の業績は学問研究にとどまらず、本人の研究成果および霊長類学の知識を広く一般の人々に知らせ社会に還元することに努め、「少年動物誌」など、子ども向けの著作も多い。また、昭和42年の

霊長類研究所の創設に関わり、助教授さらには教授として多くの研究を手がけるとともに多数の後進の育成を行った。

これらの業績に対して、紫綬褒章、毎日出版文化賞、NHK 放送文化賞、マレーシア大学名誉博士号などの栄誉が与えられている。

このたびの日本学士院エジンバラ公賞の受賞対象となったのは「日本及びアフリカにおける霊長類の野外研究—とくに環境適応と社会形成の研究—」に関するものであり、「これらの研究は人間社会の成立機構の理解に役立つとともに、社会の形成及び維持機構への環境の影響の解明を通して、絶滅の危機にある多くの霊長類の種の保全に貢献する業績である」と高く評価されたものである。

(霊長類研究所)

松本 紘宙空電波科学研究センター長が英国王立天文学協会から Associate Award を受賞

このたび英国王立天文学協会 (RAS) は、天文学分野または地球物理学分野において著しく秀れた業績を上げている研究者に授与される RAS-Associate の2004年度受賞者として松本 紘教授を選出し



た事を発表した。RAS-Associate には毎年、全世界の天文学および地球物理学の分野から英国に在住しない研究者の中から国際的リーダーシップやその分野での秀でた学術業績を上げた研究者3名ずつがそれぞれ選出されている。英国王立天文学協会は1820年に設立された、天王星を発見した Sir William Herschel を初代会長とする由緒ある学術団体として知られている。

今回の松本教授の受賞は宇宙プラズマ中における非線形波動粒子相互作用に関する研究、宇宙プラズ

マ計算機シミュレーション研究推進の国際的リーダーシップ、1999年から2002年の間、国際電波科学連合会長として発揮した国際的な指導力に対して与えられたものである。松本教授は GEOTAIL 衛星に搭載されたプラズマ波測定器の主任研究員としてチームをリードし、数々の科学的な業績を上げると同時に、国際電波科学連合の会長として、電波天文学やプラズマ波動からアンテナ、波動伝播、電気通信にいたるまで、電波科学の全般にわたる学術を推進し、多くの研究者を激励してきた。松本教授は英文論文250編を超える論文を発表し、宇宙プラズマ物理学の基礎的研究に従事すると共に、その知識を基礎に宇宙太陽発電衛星からのマイクロ波送電の研究にも従事し、国内外の学会の会長などを歴任し、国際的評価の高い研究者として知られている。

(宙空電波科学研究センター)

齋藤 烈 工学研究科教授が AAAS Fellow に選ばれる

齋藤 烈 工学研究科教授
(合成・生物化学専攻) は、
AAAS (American Association for the Advancement of Science 米国科学振興連盟) Fellow に推挙され、去る
2月14日にシアトルでの
AAAS 総会での受賞式に出席した。同氏のゲノム
化学、生物有機化学ならびに光生物有機化学に関す



る卓越した研究業績が評価された。AAAS は1848
年に発足し、143,000名以上の会員と275の関連学会
をもつ最大の科学連盟で学術雑誌 Science を発刊し
ており、毎年、物理、数学、化学、生物学、医学、
宇宙工学、政治経済学など25の分野から約200名の
フェローを選ぶ。これまで AAAS Fellow に選ばれた
日本在住化学者は2名、米国在住日本人化学者は
6名。

(大学院工学研究科)

訃報

このたび、^{たけうちのぶ こ}竹内伸子理学部等事務主任、^{たかぎ ひでお}高木秀夫名誉教授、^{ふじさわのり お}藤澤令夫名誉教授、^{まえかわてい じ ろう}前川貞次郎名誉教授が逝去
されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

竹内 伸子 理学部等事務主任

竹内伸子事務主任は、2月13日逝去された。享年
55。

同氏は、昭和46年4月京都大学工学部に採用され、
電気系教室を経て機械工学科事務主任に昇任、その後
工学部等総務課物理系事務室及び化学系事務室の
事務主任を経験され、平成15年4月理学部等理学科
物理学・宇宙物理学事務主任に配置換となった。

同氏は、この間、実に30年余の永きにわたり、研
究支援及び教室事務にあたり、大学の研究・教育の
発展に誠意を持って尽力された。また、平成13年に
は、京都大学永年勤続者表彰(30年勤続)を受けら
れた。

(理学部)

高木 秀夫 名誉教授



高木秀夫先生は、2月19日逝去された。享年94。

先生は、昭和8年北海道帝国大学理学部物理教室を卒業し、北海道帝国大学助手、同大学助教授、理化学研究所を経て、昭和22年京都大学理学部化学の教授に就任された。京都大学の評議員、大学院審議会審議委員などを歴任された後、昭和47年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、いち早く金属単結晶による精密測定的重要性を認識し、自ら育成した鉄とその合金の単結晶を用いて磁歪の異方性の測定をされ、広く世界の注目を集めた。また、優れた金属材料の開発を目指しての研究を進められると同時に、金属磁性体の自発磁化発生における磁気相互作用の果たす役割を解明され、低次元磁性体やスピン相関という時代を先取

りした研究に着手された。更に、化学反応の中間体である有機安定ラジカルの磁性に着目され、磁気共鳴による研究から磁気相互作用の強さと分子構造の関連性を明らかにし、この分野の指導的役割を果たされた。こうした分野における優れた研究業績を残されると同時に、我が国における多くの優秀な人材を育てられた。研究のみならず、京大柔道部の育ての親としての功績も、大変立派なものである。また学外にあっては日本鉄鋼協会、日本金属学会関西支部の常任理事等を歴任すると共に、関連学協会の発展に多大な貢献をされた。

これら一連の研究教育活動ならびに学会活動における業績に対して、昭和56年4月勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院理学研究科)

藤澤 令夫 名誉教授



藤澤令夫先生は、2月28日逝去された。享年78。

先生は、昭和26年京都大学文学部哲学科を卒業、同大学大学院研究奨学生を修了後、九州大学文学部助教授、京都大学文学部助教授を経て同44年教授に就任、哲学・哲学史第二講座（西洋哲学史）を担当された。平成元年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和49年1月より昭和51年1月まで文学部長のほか、「教養部にかかわる大学院問題検討委員会」委員長などを歴任され、大学の管理運営に貢献された。本学退官後は、甲南女子大学教授、さらに京都国立博物館長を歴任され、また日本西洋古典学会委員長、日本哲学会委員長、関西哲学会委員長を務められ、わが国の古典学と哲学の

発展に尽力された。

先生は、ギリシア哲学研究の分野で一貫して主導的役割を果たされ、なかでもプラトンについて厳密な文献学的方法に基づいて精確かつ斬新な解釈を提示するとともに、プラトン哲学のもつ意義と可能性を明らかにされた。またそのような哲学的考察を踏まえて現代の諸課題についても積極的に発言された。その業績は『藤澤令夫著作集』全7巻に集約されている。さらに『プラトン全集』の監訳をはじめとした多くの優れた邦訳を通じて、日本における西洋古典の浸透にも多大な貢献をされた。

以上の業績に対して、平成5年に紫綬褒章、平成10年には勲二等瑞宝章を受けられた。

(大学院文学研究科)

前川 貞次郎 名誉教授



前川貞次郎先生は、3月9日逝去された。享年92。

先生は、昭和10年京都帝国大学文学部史学科を卒業後、文学部副手、講師、京都大学人文科学研究所講師、助教授

を経て昭和27年文学部助教授、同32年教授に就任、西洋史学第二講座を担当された。昭和50年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、史学研究会の理事を務められただけでなく、日本西洋史学会の創立と発展に寄与された。また関西フランス史研究会設立をはじめとする日仏学術交流や後進の育成にも、特定の専門分野や学派にこだわらない、その寛容なお人柄で幅広く力を尽くされ

た。本学退官後も、甲南大学、帝塚山大学教授を歴任されている。

先生の専門は西洋近代史、とりわけフランス革命とその史学史的研究だが、近代史学の通弊である一国史的枠組みに飽き足らず、ヨーロッパと世界史像を視野に入れた、スケールの大きい歴史認識をつねに提起してこられた。主著は『フランス革命史研究』、『ヨーロッパ史序説』、『歴史を考える』。訳書にルソーやコンドルセなど、啓蒙思想期の古典がある。

これらの研究教育、学術上の業績によって、昭和59年4月勲三等旭日中綬章を受けられた。

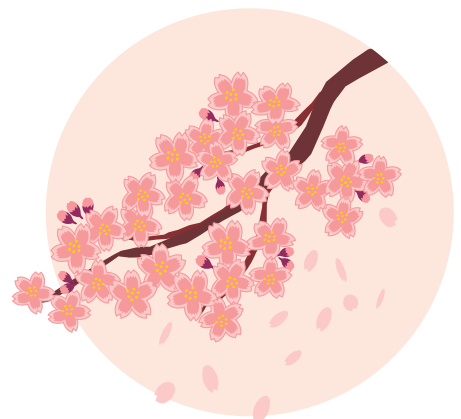
(大学院文学研究科)

日誌

2004.2.1 ~ 2.29

2月3日 名誉博士称号贈呈式
10日 評議会
13日 運営諮問会議
18日 国際交流会館委員会
国際交流委員会

19日 附属図書館商議会
24日 評議会
25日 入学試験（前期）（27日まで）



話題

平成15年度国立学校優秀施設表彰において文教施設部長賞「計画部門」を受賞

この度、カンフォーラ、インフォメーションセンターと、桂キャンパスA2、A3、A4棟が平成15年度国立学校優秀施設表彰において、文教施設部賞を受賞した。

カンフォーラ、インフォメーションセンターは、キャンパス・アメニティ事業の一環として、本部構内正門西側の官用車庫を改修し、より多くの訪問者に情報発信を行うとともに、学生・教職員をはじめ外部からの訪問者もゆとりのある雰囲気の中で気軽に飲食を楽しめる施設として計画された。

桂キャンパスA2、A3、A4棟は、工学研究科の桂キャンパス移転の先駆けとして整備された施設であ

り、平面プランは研究分野毎に占有する実験室の面積を縮小することで、プロジェクト研究を行う共同スペースや、ラウンジ等のゆとりと潤いのある空間を確保するよう計画されている。また施工にあたっては「環境との共生」と「高度な施設水準」を目指しており、現場でのコンクリート打設や型枠製作による騒音、産業廃棄物の低減効果や百年建築を目指す耐久性の高い建物の実現のために、PCaPC（プレキャストプレストレストコンクリート）工法を採用し、環境負荷の低減対策に努めたことなどが評価された。

■カンフォーラ、インフォメーションセンター



改修前



改修後



インフォメーションセンター



カンフォーラ テラス



カンフォーラ 内部



カンフォーラ 内部



カンフォーラ 内部

■桂キャンパスA2、A3、A4棟



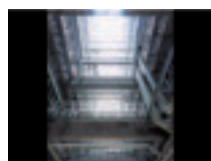
A4棟



A2棟



A2棟



テクニカルスリット



実験室



ロビー

教育学研究科附属臨床教育実践研究センターがリカレント教育講座を開催

教育学研究科臨床教育実践研究センターでは、平成9年の設立以来、毎年1回、学校教育現場等で子どもに関わる専門家を対象とする「リカレント教育講座」を開催してきた。第7回目となる今回は、教育現場で大きな問題となっている学力不振をテーマに取り上げ、学びと子どもたちの心について事例検討会とシンポジウムを行った。会場には、約80名の現職教諭やスクールカウンセラー等が参加し、「学び」や「心の教育」の本質に向き合う機会となった。

日時・講師は以下の通り。

2月13日（金） 事例検討会「学力不振・不登校」 13：00～17：00

<講師>

- 第1分科会 山上雅子（京都女子大学文学部教授）
河合俊雄（教育学研究科助教授）
- 第2分科会 吉村順子（鶴見大学文学部教授）
岡田康伸（教育学研究科教授）
- 第3分科会 桑原知子（教育学研究科助教授）
皆藤 章（教育学研究科助教授）
- 第4分科会 伊藤良子（教育学研究科教授）
角野善宏（教育学研究科助教授）



2月14日（土） シンポジウム「学力不振と子どもの心」 9：00～12：00



<挨拶> 伊藤良子（臨床教育実践研究センター長）

<シンポジスト>

- 佐藤 学（東京大学大学院教育学研究科教授）
「学びから逃走する子どもたち」
- 竹田契一（大阪教育大学名誉教授・大阪医科大学 LD センター客員教授）
「軽度発達障害（LD・ADHD・PDD）の特別支援教育について」
- 吉村順子（鶴見大学文学部教授）
「学ぶ力と聴くこと」

<指定討論者> 山上雅子（京都女子大学文学部教授）

<司会> 藤原勝紀（教育学研究科教授）

<総合司会> 角野善宏（教育学研究科助教授）

（教育学研究科附属臨床教育実践研究センター）

お知らせ

薬学研究科
第19回 21世紀の薬学を語る京都シンポジウム
「計算化学と創薬－蛋白質構造から医薬品設計へ
－寄附講座「医薬品理論設計学講座」の設立にあたって－」

1. 日時と場所：平成16年5月22日（土） 13：30～17：00 薬学部記念講堂
2. プログラム：挨拶 薬学研究科長 橋田 充
大規模量子化学計算法を用いた蛋白質と医薬品分子の結合親和力の予測
北浦 和夫（京都大学大学院薬学研究科医薬品理論設計学）
新しい創薬科学を目指して
板井 昭子（株式会社医薬分子設計研究所）
Structure and Function of Water and Ion Channels
藤吉 好則（京都大学大学院理学研究科）
3. 聴講料：無料（申込不要）
4. 定員：300人
5. 問い合わせ先：薬学研究科構造生物薬学分野 加藤博章
TEL 075-753-4617 E-mail : katohiro@pharm.kyoto-u.ac.jp
詳細はホームページをご覧ください。
<http://www.pharm.kyoto-u.ac.jp/index.html>

医療技術短期大学の動き

医療技術短期大学部部長の再任

笹田昌孝医学部教授（保健学科検査技術科学専攻 部長に再任された。任期は平成18年3月31日まで。
（内科学））が、4月1日付けで医療技術短期大学部

編集後記

例年の4月がどんな風であったかははっきりと覚えているわけではないが、「今年の春は一体どうなっているんだ！」と叫びたくなるくらいこの4月は天気の良い日が続いている。というよりも、異常な暑さである。先週までサクラを愛でていたと思ったらいきなりの夏日である。気のせい、2階の研究室の窓から眺める木々の新芽の成長が例年になく早いような気がする。それでも朝夕の少しばかり肌寒い空気は、やはり今が春であることを実感させる。この4月で広報委員2年目。怠慢をしていたつもりは毛頭ないが、委員会開催を失念することもあり、1年目はあまりお役に立てなかったと大いに反省している。外は春うらら、でも頭の中はそうならないよう「気分一新、がんばります」。

（飯田記）

【訂正】

前号（No. 588）表紙の目次随想欄の「ホスピスは生きる場所である 人見茂樹」は「ホスピスは生きる場所である 人見滋樹」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。